

## 眞価は歴史が証明するであろう

赤城猪太郎

大平氏とは同郷であり、高松高等商業の同級であり、一橋大学の同窓であつて、交渉が深く、語れば長くきりがない。思い出すままに、いくつかを書いて氏を偲ぶよすがとする。

すでに、高松高商時代、氏はイエスの僕会員しもへいとして、夜提灯をさげて街頭演説をした。氏と私は英人教師の指導を受けて英語劇をやり、氏はキングの従卒、私はキングの道化役をやつた。一橋大学時代、香川県の大先輩津島寿一氏が欧州より帰り大学講堂で講演をした。そのあと香川県出身学生と大学玄関で写真をとつたが、そのなかに大平氏の角帽姿が見える。この津島氏の推輓を得て氏は大蔵省にはいつたが、私にこんなことを語つた。「机を並べている黒金泰美氏と」君は何番で高文をパスしましたか』『僕は何十何番です』『ああ二桁ふたけたですか』との対話があつたよ』と。さらに「二人は独乙語の翻訳をやらされたが黒金氏はスイスイと頁をめくつて行くが、僕は独乙語などうまい筈がない。こんな秀才にはとてもかなわないと思つた」と。

歳月が経つて大平氏は池田内閣の官房長官を二年務めたが、休みたくて仕方がない。「それには後任を推薦せねばならない。黒金氏を推薦したが、池田首相がウンといわない。説得するのに半年かかつたよ」と。「やれやれ二、三年は案ができると思つていたら、いきなり外務大臣に任命されたよ」と。氏が池田首相にいかに信頼されていたかがわかる。その頃本郷駒込の私宅を私はしばしば訪ねて朝食を共にしていたが、氏は起きるとすぐ井戸端に出て冷水を浴びて台所へくる。「これは僕の修行だよ」といった。

思い出は前後するが、終戦直前津島寿一氏が大蔵大臣になった時、たまたま便所で並んで小便をしていると「君はただいまから俺の秘書官になれといわれたよ。便所で辞令をもらったようなものだよ」といったことももある。さらにさかのぼると、氏の横浜税務署長時代、香川県出身の南原義種という記者が訪ねてきて、税務行政のことを話しているうちに「君では話がわからぬ、署長を出せ」というと、「俺が署長だよ」と大平氏がニコニコ笑っていた、という話を南原君から聞いた。急がず騒がず、ヌーボーとしている大平氏の姿が見えるようである。

もう一つ加えよう。かつて大平氏の令嬢が森田一氏（現衆議院議員）と東京パレスホテルで結婚式をあげた。津島寿一氏が媒酌人であったが、一番目に池田首相が祝辞を述べた。その最後に新郎新婦は忍耐と寛容の精神をもって生活を送ってほしいと結ぶと、すかさず来賓席から哄笑が起った。池田首相のイメージには忍耐とか寛容とかいうものはない。これは大平氏がいわせているのだと思っただけに違いない。

大平氏の生涯を通じて最も得意の時代は池田首相の秘書官時代と官房長官時代ではなかったかと思う。田中首相とともに中国へ使わして周恩来、毛沢東とわたりあったときなどは決死の覚悟であったといつたことがある。氏は元来口の重い男であるが、榮進するにつれて、ますます寡黙になっていった。こういつた大平氏は一体何であったか。一、氏は政治家である前に宗教家であり哲学者であった。二、氏はできるかぎり人に譲った。三、氏はものことに耐えられるだけ耐えた。四、氏の歩んだ道は世界に通ずる道であった。五、氏の選んだ道は古今に通ずる道であった。したがって氏の真価は世界が判定するであろう。氏の真価は歴史が証明するであろう。

中米パナマ市には既にウィンストン・チャーチル通り、ローマ法王ヨハネス二十三世通りがあるが、新たに日本大使館に面する通りを大平通りと命名する由である。大平氏の面目躍如たるものがある。追悼歌一首を捧げて冥福をいのる。煉獄たねくを出でて天涯てんがにあそぶとふ大いき生命いのちを長くおもはん

（富士化学紙工業社長）